

文学 散歩

東 延江 著

北海道の碑

(いしぶみ)

北海道新聞社

秋すに葉しきる千葉の木
雪とさうらひくまはいに
霜はいま雪とらうてたうつ
朝日さす紅葉うつくしきかな
若山 秋水

歌人 若山 秋水
大正十五年十月二十五日秋の時の
中と上砂川の紅葉橋を渡り
農山へ入つて初めて身に降りか
る雪を愛しむ。雪中所見二首
を詠む。開基公園東へ開町
三周年にあたり建立す。
昭和二十四年十月十八日

文学
散歩

北海道の碑

(しんぶん)

東

延江著

東 延江（あずま・のぶえ）

昭和13年4月12日、旭川市生まれ。
北海道詩人協会常任理事、北海道
文学館評議員。所属詩誌「茴」「幻
視者」「陽」。詩誌「情緒その後」
発行世話人。

〈著 書〉詩集「渦の花」「季の音」
「善きサマリア人のように」ほか。
HTBまめほん「クサベラ・レー
メ」「北海道関係詩集年表」「野の
花・木の花」ほか。

〈住所〉005・札幌市南区真駒内
幸町3丁目2-5-104

文学散歩 北海道の碑（いしおみ）

1989年12月20日 発行 定価1400円

著 者 ● 東 延江

発行者 ● 相神 達夫

発行所 ● 北海道新聞社

札幌市中央区大通西3丁目6

電話(代表)011-221-2111

振替・小樽 9-28398

印刷所 ● 三陽印刷株式会社

製本所 ● 有限会社石田製本

● 落丁本、乱丁本はお取り替えいたします。

文学散歩 北海道の碑

目

次

道南編

文学碑 ● 亀井勝一郎

鶴田知也

詩 碑 ● 片平庸人

西条八十

高橋掬太郎

三木露風

歌 碑 ● 石川啄木

宮崎郁雨

句 碑 ● 松尾芭蕉

道央編

文学碑 ● 有島武郎

石森延男

葛西善蔵

小林多喜二

子母沢寛

辻村もと子

中村武羅夫

葉山嘉樹

船山馨

本庄陸男

八木義徳

山本有三

詩 碑 ● 浅野晃

石森和男

伊藤整

国木田独歩

沙良峰夫

野長瀬正夫

32 30 28 24 22 20 18 16 14 12 10 8

62 60 58 56 54 52 50 48 46 44 42 40 38 36 34

歌

碑●伊東音次郎

八田尚之	64
林芙美子	66
森みつ	68
吉田一穂	70
和田徹三	72
違星北斗	76
小田観蜚	78
北見恂吉	80
金田一京助	82
芥子沢新之介	84
斎藤茂吉	86
相良義重	88
成田れん子	90
西村一平	92

句

碑●青木郭公

長谷川正治	94
細谷徹之助	96
宮崎芳男	98
宮田益子	100
宮西頼母	102
山下秀之助	104
与謝野寛・晶子	106
吉井勇	108
若山牧水	110
青木郭公	112
木村敏男	114
幸田露伴	116
斎藤玄	118
佐藤晴生	120
高濱虚子	122

道北編

高濱年尾

124

寺田京子

126

土岐鍊太郎

128

新田汀花

130

野村泊月

132

長谷部虎杖子

134

花の本聴秋

136

榛谷一夢・美枝子

138

比良暮雪

140

水野波陣洞

142

水見悠々子・寿男

144

山口青邨

146

詩

三浦綾子

152

碑 ● 小熊秀雄

154

加藤愛夫

156

今野大力

158

時雨音羽

160

野口雨情

162

宮沢賢治

164

百田宗治

166

歌

碑 ● 岸本翠月

168

北原白秋

170

九条武子

172

小林孝虎

174

酒井広治

176

白川了照

178

中山勝

180

並木凡平

182

西川青濤

184

松田一夫

186

宮柊二

188

山名薫人

190

句
碑●白田亜浪

192

北光星

194

塩野谷秋風

196

長田幹彦

198

長谷川零餘子

200

藤田旭山

202

川柳碑●敦賀谷夢楽

204

道東編

文学碑●久保栄

208

吉屋信子

210

詩
碑●佐藤春夫

212

更科源蔵

214

牧章造

216

歌
碑●石川啄木

218

中城ふみ子

220

松浦武四郎

222

句
碑●伊藤伯翠

224

久保洋青

226

戸川幸夫

228

刀禰無句

230

細谷源二

232

水原秋桜子

234

碑目録(地域別)

236

あとがき

269

装幀・レイアウト 高山美根子



道南

編

不遜

なれ
は

来平の

急ぐを失う

路の首を

文学碑

亀井勝一郎

建立 昭和四十四年十月十四日
所在地 函館市青柳町二十三番地

人生

邂逅し

開眼し

瞑目す

交あし通

市電宝来町下車、徒歩三分

碑いしぶみ余話

電車を降りてアサリ坂を登りつめたところに竹垣を廻した小公園があり、その中央にどつかりと大きな石がおかれている。

日高産の通称「幸太郎石」で、銘板がはめこまれた直筆の亀井勝一郎文学碑だ。心ある人々によつて建てられたと説明板に書かれ、函館に生まれ、函館を故郷とした一評論家の言葉は考えさせられる独白としてひびく。

「創作における当面の諸問題」(昭7・6「プロレタリア文学」)がデビュー作で、昭和四十一年九月、札幌の北海道文学展のため、三十枚の色紙に自筆の年譜を書き、それが絶筆となった。

文学碑建立と同時に「生誕の地碑」が十勝石に銘板をはめこみ元町に建てられた。

標柱は武者小路実篤の文字である。



碑文は「東海の小島の思い出」の一節で、碑は勝一郎の生まれた門前にあたる東本願寺函館別院の一隅で元町カトリック教会の前の位置にもなる。

亀井勝一郎（かめい・かついちろう） 明治四十年二月六日函館市生まれ、昭和四十一年十一月十四日没。

昭和二年「新人会」会員、同九年「文学評論」「現実」創刊に参加。同年保田与重郎らと日本浪漫派結成、同十年「日本浪漫派」創刊、編集の中心となる。同十三年「文学界」同人。

著書「人間教育」（第四回池谷信三郎賞受賞）「東洋の愛」「大和古寺風物誌」「親鸞」「北海道文学の系譜」「我が精神の遍歴」「現代人の遍歴」他。

文学碑

鶴田 知也

建立 昭和六十年六月十五日

所在地 山越郡八雲町春日

(俗称ビンニラ)小公園



不遜なれば

未来の

悉くを失う

交あし通

J R 函館本線八雲駅から旧国道五号線に出て、国道二七二号線八雲―熊石線を約四キロ、車で十分位

碑いしぶみ余話

遊樂部川の瀬音が耳を打つビンニラの丘、丘の一角に鶴田知也文学碑がある。小公園となつたここは清楚な碑にふさわしく迎えてくれた。

文学碑建立期成会(代表太田正治)により、ユーラップ川系の自然石に直筆で彫られたものだ。

また、市街地より三キロほどの俗称トコタンの丘、八雲町大新には「トコタンの丘」という作品碑が同時に建立、没後トコタン墓地には分骨もなされた。文学碑の副碑に建立が五月とあるが、六月の彫りちがいだという。

大正十一年八雲を訪れ、約六ヵ月滞在し、八雲を題材にした数多くの作品を生んだ作家の永遠の眠りの地になる、と同時に遺品の常設展示もなされるという。

——ユーラップの奔流が、緩やかな流れと変る所、

山地と平地との境目なるビンニラの左岸に、コシヤメインはポンチャシを建て、やがて、美しいムビナを迎えた。此処は、ピリカハプタラあるいはヌエラマスイカムイミンダラと呼ばれ、開闢の古から、毎年一度神威が遙る々々天より降り給ふ例しとなつていたのである。それはウンポウチュプからシュナンチュプに至る間であるが、その頃のビンニラ程美しい所は又となかつたのだ。——
芥川賞受賞作品「コシヤメイン記」の一節は當時をかいま見せてくれる。

鶴田知也(つるた・ともや) 明治三十五年二月

十九日、福岡県生まれ、昭和六十三年四月一日没。

大正十一年六ヵ月間八雲町滞在。

著書「コシヤメイン記」「北辺の土」「若き日」「トコタンの丘」「北方の扉」「画文草木帖」他。「ハッタラはわが故郷」(小学館第四回児童文化賞受賞)。

碑 片平 庸人

建立 昭和四十六年九月

詩

所在地 函館市大森浜 啄木小公園

北の海にび色にかびろく
雲ひくく まろし砂丘
見のかぎり 茫々
餓えがらす そが雪の上
たゞあるく
ばっさ ばっさナ

交あし通

小公園は国道二七八号線湯川方面から函館山に向かう海ぞいに袴姿の啄木像が見える。
市バス日乃出町下車、徒歩一分の位置。

碑 いしぶみ余話

紙箱職人の片平が函館棧橋におりたつたのは昭和五年二月だった。羽織袴に黒マントといういでたちで、この時以来函館に住みつき、海老名礼太主宰詩誌「北海詩戦」に参加。

昭和六年九月刊の「北海道詩集」（海老名編、発行、函館）の詩人録の片平の項には——発芽期を井泉水の句に私淑し中期を御風に師事したが主に童民謡の作多し。生まれながら放浪哀美と酒癖ありて洞穴生活を夢みる——と書かれていたが、二十数年函館に住みついたということは余程詩心をゆさぶった街だったのかも知れない。

片平の主宰する「北日本民謡」に「酒」と題されて発表した高橋掬太郎の作品はのちに「酒は涙か溜息か」で一世を風靡。



海老名礼太の詩集「蟹の情熱」のケースは片平の手によって作られた。

海に面した小公園に、啄木、西条八十碑と共に、大森浜で不慮の死をとげた片平の詩碑が、安山岩に銅板をはめこみ、友人、詩友らの手によって建立。また、昭和五十二年十二月「青いツララ」を刻んだ片平の童謡碑が没後二十五年を記念し井伊各量によって糸魚川（新潟県）に建てられた。

片平庸人（かたひら・つねと） 明治三十五年七月二十一日仙台市生まれ、昭和二十九年十二月二十六日没。

大正七年前より野口雨情、西条八十に私淑、児童雑誌「童話」に童謡発表、独自の民謡は「片平ぶし」として民謡関係者に広く知られている。「北日本民謡」創刊、主宰。民謡集「鴉追い」「不感貧乏」童謡集「夢に降る雪」「ほうほう春」。

碑 西条 八十

詩

建立 昭和三十四年十月二十三日

所在地 函館市大森浜 啄木小公園

眠れる君に捧ぐべき
矢車草の花もなく
ひとり佇む五月寒
立待岬の波静か
おもひでの砂ただひかる

交あし通

市バス日乃出町下車、徒歩一分

碑いしぶみ余話

雑誌「家の光」の取材で来道の際、立待岬の啄木墓碑に詣でた際に啄木に捧げた詩で、函館ライオンズクラブ、函館東ライオンズクラブにより、直筆で彫られて建てられた。

かつてこの辺りは人家がなかったが、函館市が市有地を提供し、棒二森屋社長らの尽力で整備し、小公園として、本郷新制作の啄木の銅像と台座に潮かをる北の浜辺の砂山の

かの浜薔薇^{はまなす}よ今年も咲けるや

の一首が刻まれ除幕されたのが昭和三十三年、その後、昭和五十二年若干拡張工事をし公園も広くなった。

左手に処女詩集「あこがれ」を持って思索する啄木像は遠くからでも目に入りわかりやすい。その啄木像の前方に八十の詩碑があり更に左手には